

記事

外国メディアが見た開発途上国事情 ～NPR（米）のハイチ地震復興報道～

福田 幸正
(公財) 国際通貨研究所

2008年9月のリーマンショック直後、世界金融危機の震源地となった当のアメリカの一般の人々がどのようにこの危機を捉えているのか関心を抱いた。そこでインターネット上をエンドレスにサーフした結果辿りついたのがNPR (National Public Radio : 米国の公共放送) のブログ“Plant Money”だった (<http://www.npr.org/blogs/money/>)。あれから早3年経ったが、毎朝同ブログをチェックするのが自分の日課となっている。

Planet Moneyは、世界経済動向が一般アメリカ人の生活に直接影響を与えているにもかかわらず、世界経済理解のための一般向け報道番組が少ないとして、2008年8月に開設されたブログだ。奇しくもその直後にリーマンショックが起こったことによって、あらためてその基本的スタンスが表明された。それは、アメリカが震源地となった世界金融危機を専門家の独占事項にせず、アメリカ国民とともに理解し、そして危機から派生する様々な困難を皆で乗り切ろう、という力強いものである。なお、当初からのブログのモットー「知的に、そして楽しく」という姿勢に変わりはない。いたずらに不安を煽るばかりの薄っぺらな活字が躍る報道とはかなり違って見える。

ブログ開設から3年以上経ち、広範囲の発信を行ってきたので、記事は、Currency, Finance, Debt, Trade, Jobsなどに分類され、その中にはDevelopment Economiesという目次も立っている。

Development Economiesで継続的に取り上げられているテーマの人に2010年1月12日に発生したハイチ地震がある(その他には、例えばインドを舞台とした「腐敗」が取り上げられており、これもまた興味深いものがある)。30万人以上が死亡するという大地震に見舞われたハイチは、その後発生したコレラで6300人以上の死者を出しており、依然60万人が難民キャンプでの厳しい生活を強いられているという。最近の欧州の信用不安の陰に隠れてハイチが国際社会から忘れられてしまうことが懸念されている。

NPRの記者たちは地震直後に現地に入り取材を開始するが、早い段階でハイチが以前から「NGO共和国」と揶揄されていることの本質を見抜く。統治能力が低いがためにハイチ政府はNGOをはじめとする外国ドナーに振り回され続けてきた。そんなハイチ政府も今度こそはと本当の復興を目指す、思いの丈と現実のギャップはそう簡単には埋まらない。そんな話を大統領とのインタビューで聞き出して帰ろうとしたところ

で、大統領から呼び止められる。「君たちは他の外国メディアのようにハイチ政府の腐敗について聞きたくないのかね？」半分忘れていたようだが NPR の記者たちにとってはそんな手垢の付いた陳腐な話はどうでもいいのだ。それよりも、どうしようもない状態のハイチの復興の糸口を探求することが重要だ。そこで録画録音機材を自ら担いで縫製工場に、難民キャンプに、学校にどんどん入りこみ、市井の人々の中に復興の芽を探し求めるのだった。その視線はあくまでもハイチの人々と同じ高さだ。そうであればこそ、実にいろいろなことが見えてくる。そして NPR の記者たちはそのような密着取材を実に自然体でやってのける。それは爽やかささえ感じさせられる。彼らから学ぶことは多そうだ。特にジャーナリストと呼ばれている人々と、援助に携わる者は、だ。

NPR Planet Money のハイチ復興取材での一つのエピソードを私見と共に紹介させて頂きたい。

NPR の記者たちは雑貨の卸を生業とするおばさんと出会う。おばさんはマイクロファイナンスからの借金を元手に隣国のドミニカ共和国との国境の市場で雑貨を仕入れる。それを首都ポルトープランスに持ち帰り小売商に掛売りする。このマイクロビジネスの実入りは結構良かった。ところが地震で全ての在庫は瓦礫の下敷きとなり、借金だけが残った。途方に暮れてばかりもいられず、おばさんは何処から集めたのか鶏の屑肉を売り始めた。そんなおばさんのたくましさには驚かされる。そこには貧困に打ちひしがれた惨めさなど微塵もない。おばさんがネアカなのは救いなのだが、とにかく借金返済の見通しは全く立たない。ところが、そんな様子を見ていて黙ってられないのがアメリカ人のチャリティー精神だ。NPR の記者の呼びかけでおばさんのために瞬く間に数千ドルの募金が集まった。NPR の記者はおばさんにその浄財を直に手渡した。ささやかだが厳かなセレモニーとなった。お蔭でおばさんは耳を揃えて借金を返すだけでなく、小さな雑貨店を開くことができた。またその機会に、将来に備えて預金口座を開設し、毎月貯金することを約束してもらった。うまく仕組みれば条件付現金給付 (conditional cash transfer: CCT) になる。

これで、めでたし、めでたし、と言いたいところだが、そうはいかないのが現実だ。急におばさんが雑貨店の店主に納まったので、だんなさんは面子を失ったと思ったのか、なんと家を出て行ってしまった。そして、おばさんは一人ぼっちになってしまった。

旦那さんがいなくなった今、おばさんの悩み事は、治安が悪化する中、雑貨店を守るために用心棒を雇うかどうか、ということだそうだ。

善意からとはいえ、おばさんを援助したことによって結果的にとんでもない罪作りなことになってしまった。しかし、ここで話は終わらない。今後のおばさんの「細うで繁盛記」を NPR Planet Money が引き続き取材することに期待したい。そして、おばさ

んの幸せと、ハイチの復興を願わずにはいられない。

なお、最近 NPR の姉妹公共放送 PBS (Public Broadcasting Service) は、雑貨商のおばさんの話を含むハイチ復興報道特集を組んでいるので、是非ご覧いただきたい。その際、ハイチ地震と東日本大震災とを重ねて見て見ることも有意義と考える。

(<http://www.pbs.org/wgbh/pages/frontline/foreign-affairs-defense/optimist-in-haiti/frontline-and-planet-moneys-reporting-on-haiti/>)

NPR や PBS は公的資金を受ける報道機関であるが (民間資金も受け入れている)、いわゆるリベラル派の報道機関と目されている。そのために昨今の米国の財政難の中で、保守派から格好の攻撃の標的になっている。リベラル派かどうかのレッテルはさておき、その真摯な報道姿勢は好感が持てるし、報道内容のレベルは高い。自分にとっては仕事柄重要な情報源の一つだが、それ以上の意味で今後の NPR や PBS の米国内での取り扱い方を心配している。